



第26回院内コンサートの様子

塚原 るり子様（ヴァイオリン）、堀中 モンティ 倫子様（ピアノ）をお迎えし、2024年10月19日(土)に第26回院内コンサートを開催しました。

♪アンコール曲

パラディス作曲 「シチリアーノ」





湘南鎌倉総合病院♪院内コンサート

名曲の調べを味わい芸術の秋を楽しむひととき♪

2024年10月19日(土)
15:00~15:30

塚原 るり子 (ヴァイオリン)
堀中 モンティ 倫子 (ピアノ)

Programme

- ◆ ジュール・マスネ：
タイスの瞑想曲
- ◆ ヨハネス・ブラームス：
ヴァイオリンとピアノのためのソナタ
第2番 opus 100
- ◆ フリッツ・クライスラー：
中国の太鼓
- ◆ パブロ・サラサーテ：
ツイゴインエルワイゼン

主催：湘南鎌倉総合病院・院内コンサート実行委員会

出演者ご紹介

塚原 るり子 *Tsukahara Ruriko*



東京藝術大学音楽学部卒業後、渡仏。パリ・エコールノルマル・ドゥ・ミュージック、スイス・メニューイン音楽院修了。ティボール・ヴァルガ国際ヴァイオリンコンクールで1位なしの2位受賞、ホルド音楽祭1位金賞、エリザベト王妃国際コンクール4位銀賞。1976~78年バイヤール室内管弦楽団常任メンバー。81年以降ベルギー・スイス、ドイツ、イギリスなどでリサイタル、オーケストラとの協演。85年フランス国立放送管弦楽団コンサートミストリスに就任。

97~01年東京藝術大学音楽学部准教授、05~11年同大学付属高校非常勤講師。2010年より東京などにて主に室内楽コンサートを開始。これまでに斎藤孝彦、海老原はるみ、青木直子、井上武雄、石井志都子、G.ブイヨン、D.オブノー、Y.メニューイン、A.リーシーなどの各氏に師事。

堀中 モンティ 倫子 *Horinaka Monty Tomoko*



リシュバン女史の招きで渡仏。エコールノルマル音楽院の演奏資格を首席で取得。パリオペラ座等、オーケストラのピアニストを務める他、フランス放送交響楽団、パリ管弦楽団等のソリスト達と共演。リヨン国立高等音楽院の教授資格取得クラスの指導、パリ国立高等音楽院の試験審査等、後進の育成に携わる。演奏会に来られない人々に音楽を届ける活動をしている。

曲目解説

ジュール・マスネ (1842-1912)：
タイスの瞑想曲 *Andante religioso*

フランスの作曲家マスネによるオペラ《タイス》の中ほどで奏される器楽曲が、ピアノ伴奏版で親しまれている。恋に生きてきた舞姫タイスは、そこに一抹の虚しさを感じていたためもあった。修道士アタナエルから信仰の道に入るよう説得され、しばし思い惑う。そこで聞こえてくるのが、この独奏ヴァイオリンによる清らかにして甘美な音楽。やがてタイスは折りの生活の果てに、同曲が流れるなか、天国に召されてゆく。居合わせたアタナエルは対照的に、彼女への現世的な恋心が募るばかりで、後悔に苦しむ。

ヨハネス・ブラームス (1833-97)：
ヴァイオリンとピアノのためのソナタ 第2番 opus 100

1885年に第4番のシンフォニーを完成させた円熟期のブラームスは、翌年の夏をスイスのベルンに近いトゥーン湖畔の避暑地で友人たちと過ごし、このヴァイオリンソナタ第2番の他にもチェロソナタ第2番やピアノトリオ第3番など、室内楽の名作を残している。ブラームスが敬愛するクララ・シューマンは、明朗な美しさのこのソナタを、「これほど全てにおいて私を喜ばせてくれた作品はない」と言った、と伝えられている。湖の名にちなんで、「トゥーナソナタ」と呼ばれる。

1) *Allegro amabile*, 2) *Andante tranquillo - Vivace - Andante - Vivace di più - Andante - Vivace*, 3) *Allegretto grazioso (quasi Andante)* の3楽章構成。

フリッツ・クライスラー (1875-1962)：
中国の太鼓 *Allegro molto, quasi Presto*

オーストリア生まれのヴァイオリニストであるクライスラーは、自分が演奏するため、特にヴァイオリンの小品を多く作曲した。この曲は、東洋旅行中に耳にした太鼓のリズムにアイデアを得て書かれたとされる。クライスラーといえば、主に3拍子によるウィーン風の曲調で親しまれているが、ここでは急速な中国風メロディーが特徴。

パブロ・サラサーテ (1844-1908)：
ツイゴインエルワイゼン
Moderato - Un poco più lento - Allegro molto vivace

サラサーテは、19世紀を代表するヴァイオリンの名手。スペイン生まれだが、後にパリで学び、やはり自らの演奏会用に、その技巧を駆使した小品を作曲した。標題はジプシーの旋律という意味で、流浪の民の嘆き、悲しみ、喜びがすべて込められている。1878年、34歳のサラサーテによる名曲。現在も世界中で戦争や争いごとなどが絶えません。そこで虐げられている人たちの気持ちと重なっている面があるように思います。

(解説 堀中モンティ 倫子・塚原 るり子)